
白光の日々

柊葉一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白光の日々

【Nコード】

N9023E

【作者名】

柊葉一

【あらすじ】

目が覚めると、左手には鎖に繋がれた手錠。そして無機質で真白な部屋。どうしてこんなことになっているのか、美紀には何も分かっていなかった。

第一話

目の前に飛び込んできたのは、自分のものと思われる手だった。松浦美紀はぼうつとした意識で起き上がる。

洗いたてのようなま白いシャツが爪に引っ掛かった。そこで気がつく。

左手を胸の高さまで上げる。少しの重みと、じゃらりという音。

左の手首に、手錠がかけられていた。そしてその手錠の先には鎖が繋がれており、その鎖は部屋の隅のステンレス造りのポールに巻きつけられていた。

美紀の頭はようやく、異常を認識した。

「なに、これ……」ようやく、声を絞り出す。

周りを見渡す。何の変哲もない、無機質で殺風景な部屋だった。

美紀が座り込んでいるベッドは、枕側を壁に沿って置かれていた。ベッドから正面を向いた白い壁に、扉が一つある。しかし、その扉までの遠さが、この部屋の広さを証明していた。美紀が左を向くとすぐそこにも扉があった。美紀はゆっくりとベッドから降りる。その時、自分の足が震えていることが分かった。

じゃらつと音を立てて、鎖がベッドから落ちる。その音に一度振り返りながら、美紀はその扉を開ける。おそろおそろ中を覗き込むと、白いタイルの床、左手に清潔そうな洗面台、右手には白い洋式の便器、その奥には半透明のガラスの仕切りがあり、1メートルほどの隙間からガラスの向こう側へいけるようになっていた。レストルームのようだと判断して、美紀はその扉を閉じる。

どこかへつながっているのではという期待は、裏切られる形になった。

じりじりと現実感が迫ってきて、美紀は自分の置かれた状況を理解できなくなっていた。

ここは、どこ？どうして手錠なんかにつながれているのか……第一、

自分がいつ眠ってしまったのかという記憶も曖昧だ。

ベッドの向こう側は一面大きな窓が並んでいた。そこから、眩しいくらいの日差しが差し込んできている。

「誰か……」

意識せずに、言葉が漏れた。

「誰か、誰かいませんか！……すいません！！」

叫びながら、ふらつく足取りでもう一つの遠い扉へ歩き出す。

「誰か……っ」

急に、ぐん、と左手が引き留められる。足取りが勢いづいていたせいで、危うく後ろに転びそうになった。

改めて左手の手錠の存在を確認させられて、美紀はそれを見つめた。たった今擦ったのだらう。手首が赤くなっていた。痛い。

普段は何とも感じない、小さな擦り傷の痛みさえ、今の美紀には涙を浮かべるには十分だった。

分らない。落ち着けない。自分の動悸が、異様に早い気がした。座り込んだフローリングの床が冷たく、せつかく掴みかけた現実感を鈍らせる。まだ夢の中ではないのか。いや、むしろそうであって欲しい。知らない場所。理解できない状況。これは自分の知っている現実ではなかった。

どこからともなく、足音が聞こえてきた。

美紀は一瞬、助けを求めて叫ぼうとしたが、思いとどまった。そして耳を澄ませて、足音が自分があるこの部屋に、近づいてきていると気付いた。

体が固くなるのを感じた。もしかしたら、自分をこんな状態にした張本人かもしれない。

足音はもうすぐそこまで来て、扉の前で止まった。

ガチャリ、と鍵を回す音が聞こえて、美紀の3メートルほど前にある扉は、ゆっくりと内側に開いた。美紀は瞬きもせず、それを見つめていた。

第二話

その扉から現れたのは、ひょろりと背の高い、白いシャツにゆるそうな黒のジーンズをはいた男だった。目深に前髪がかかっており、顔をはつきりと見ることができない。

美紀は座ったまま、手足をどうにか使って、強張った体を後退させた。

男は扉を体で押えたまま、一度後ろ向きになってかがみこむと、次に向き直って部屋へ入ってきたときには、両手でトレイを持っていた。

美紀はじっと、その男の動作を見張っていた。問いただしたいことは山ほどあったが、口に出すことは難しい。

男はトレイを持ったまま、ゆっくりと美紀の方に歩いてきた。美紀は驚いて、ガクガクした体で、さらにベッドの方へ後退する。美紀が動いたびに、手錠に繋がれた鎖が、じゃらじゃらと音を立てた。

その間も、美紀は男を見つめ、睨みつけていた。

男は、先ほどまで美紀が座り込んでいたあたりまでくると、すっと立ち止まり、そこにかがみこんでトレイを置いた。ステンレスの丸いトレイの上には、皿にのったロールパンが二つと、何かが入った白いマグカップが乗っていた。

また男が立ち上がり、美紀もまた男の顔へ視線を戻す。といっても、隠された顔からは、表情は読み取れなかった。

「松浦美紀さん」

急に男が言った。美紀はびっくりして、奥二重の大きめの目が、さらに大きく見開かれた。

「気分はどう？丁寧に運んだつもりだけど、どこか痛めたりしていい？」

意外な相手の問いに、美紀は戸惑いながらも頷いてみる。男は「そう、ならよかった」とだけ答えた。

「……あなた誰？」

ようやく、声を出すことができた。そこからは溢れるように、疑問が飛び出してくる。

「なんであたしを知ってるの？ここはどこ？この……手錠、なんであたしこんなことされてるの？あなたがやったの？」

「落ち着いて」

男の声は、重く、静かに透った。

「落ち着けるわけ、ないでしょ」負けじと美紀は言った。相手の出方を伺うように、強い視線で睨みつける。

「僕は、ユズキ。僕が君を知ってるのは、僕と君が会ったことがあるからだよ。君は覚えてないだろうけど。」

男は視線をそらすように、窓のほうを見た。一面の窓には、白いカーテンがかかっており、その色を透かした陽の光が、部屋を一層明るくしていた。外は晴れているようだ。

「君には、しばらく僕と一緒にいてもらう。別に危害をくわえるつもりはないし、時期が来たら、逃がしてあげる」

淡々と、そのユズキという男は言った。まるで物語でも読み上げているかのようだ。

「これは、誘拐ってこと？」

「そうだね」

「身代金が目的だったら、無駄よ。うち、貧乏なんだから。大学だって、あたしが特待生だから通わせてもらえてるんだもの」

「うん、知ってる」

意にも返さない。ユズキの目的が何なのか分からなかった。

「じゃあ何で……」

「とにかく、しばらく君にはここにいてもらうから。欲しいものは、言ってくれば、可能ながぎり用意する。食事は、置いておくから、食べるといい」

それだけ言うと、ユズキは扉のほうへ引き返していく。

美紀はその後ろ姿が扉の向こうに消えるまで見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9023e/>

白光の日々

2010年10月28日03時30分発行